

1 テレマン 4つのヴィオラのための協奏曲 第4番二長調

G.P.TELEMANN : Concerto No.4 in D, TWV.40:204 (arranged for 4 violas)

演奏：1) 猿渡美穂子 2) 高尾真里恵 3) 山口 真 4) 佐藤優季 (ヴィオラ)

[7分]



●佐藤 優季 Yuki Sato (日本)
2006年東京藝術大学音楽学部ヴィオラ専攻卒業。2008年よりリムスキー＝コルサコフ記念ロシア国立サンクトペテルブルク音楽院にて、ウラディーミル・ストビチュェフに師事。



●猿渡 美穂子 Mihoko Saruwatari (日本)
東京音楽大学卒業後に渡独、International College of Music Hamburgにて学び、マスターを卒業。これまでにヴァイオリンを大谷康子、嶋田慶子、ヴィンフリード・ルスマン、サシコ・ガヴリロフの各氏、

ゲオルク・フィリップ・テレマン(1681年生～1767年没)は、バッハやヘンデルに並ぶバロック時代を代表するドイツの作曲家。聖職者の息子として生まれ、音楽はほとんど独学でしたが、10歳になるまでにヴァイオリン、フルート、リュート、クラヴィーアなどの楽器を習得し、12歳でオペラを作曲する神童でした。ライプツィヒ大学で法学を学ぶ傍ら、学内でコレギウム・ムジクム楽団を結成。1721年ハンブルク市の音楽総監督に就任、終生その地位にあって、室内楽曲、協奏曲、教会カンタータ、オペラなど、生涯に3000曲以上の作品を残しました。

本日のニューイヤー・コンサートの開幕を飾るヴィオラ四重奏は、原曲が「4つのヴァイオリンのための協奏曲 第4番イ長調」。ヴィオラ編曲では二長調となります。バロック時代の一般的な協奏曲と異なり、通奏低音をもたない4本のヴィオラだけの合奏で、緩急緩急(グラヴェーアレグロ―アダージェー―スピリトゾ)の4楽章からなります。

ヴィオラを百武由紀氏に師事。2009年6月ムジークハレハンブルクでLandes Jugend Orchestra Hamburgとメンデルスゾーンヴァイオリンコンツェルトを共演。



●高尾 真里恵 Marie Takao (日本)
京都市立芸術大学音楽学部ヴィオラ専攻卒業。同大学大学院音楽研究科修士課程修了。在学中に京都室内オーケストラのメンバーとして渡独、「ヴァインガルテン若い芸術家による音楽週間」に2度参加。同オーケストラにて2004年度バロックザール賞受賞。2006年アジアユースオーケストラのコンサートツアー



●山口 真 Makoto Yamaguchi (日本)
1986年生、4歳よりヴァイオリンをはじめ18歳でヴィオラに転向する。2010年東京芸術大学卒業。第9回日本演奏家コンクール特別賞受賞。在学中、学生オーケストラ・ベルリン公演参加。現在オーケストラ、室内楽、アマチュアオーケストラのトレーナーなど幅広く活動している。清水高師、大野おたるの各氏に師事。在々木亮氏の指導を受ける。

2 テレマン 無伴奏ヴィオラによる 12のファンタジー 第9番短調

G.P.TELEMANN : Twelve Fantasies for viola solo, No.9 in B minor

演奏：山本 由美子 (ヴィオラ)

[6分]

先に述べたように、ゲオルク・フィリップ・テレマンは非常に「多作」な作曲家でした。1732年から1735年、テレマンが50代の頃、様々な独奏楽器(フルート、チェンバロ、バス・ヴィオール、ヴァイオリン)のために『ファンタジー』を書いています。ヴィオラ版の原曲となっているのは「無伴奏ヴァイオリンのための12のファンタジー」。3楽章ないし4楽章の12曲が、2つの長調の次に1つの短調という配列で並び、巧みなコントラストがつけられています。

本日演奏される「第9番短調」は、典型的なバロック時代の舞曲「シリエンヌ」ではじまります。付点リズムが特徴的なゆったりとした曲想の後に、躍動的な第二楽章「ヴィヴァーチェ」が挟まり、第3楽章「アレグロ」では、さらにテンポを速めた民族的な踊り(ジーク)で結ばれます。

※演奏者の山本由美子のプロフィールは裏面に掲載

CD『G.P.テレマン：無伴奏ヴィオラによる12のファンタジー／今井信子』EPSON (TYMK-020) ▲



3 ブルッフ クラリネット、ヴィオラとピアノのための8つの小品

M.BRUCH : Eight Pieces for Clarinet, Viola and Piano Op.83

演奏：西田 佳代 (クラリネット) 田中 利恵 (ピアノ)

1, 2) 大野 若菜 (ヴァイオリン)
3, 4) イェジン・ハン (ヴィオラ)
5, 6) タマーシュ・ロジヨシュ (ヴィオラ)
7, 8) セジュン・キム (ヴィオラ)

[37分]



●イェジン・ハン Yejin Han (韓国)
2007年から3年間、ソウル藝術高校オーケストラのヴィオラ首席を務め、ウィーンのみジークフェラインで演奏。2009年ソウル藝術高等学校を卒業。2010年5月東京で「ヴィオラスペース2010」の公開マスタークラスに参加。Sung Eun Kim氏、Eun Sik Choi氏に師事。現在、ソウル大学校2学年に在学中。◎アジアからの受講生に対する奨学金助成対象者



●大野 若菜 Wakana Ono (日本)
3歳よりヴァイオリンを始め、15歳でヴィオラに転向。ヴァイオリンを瀬戸瑠子、漆原朝子の各氏に、ヴィオラを川崎和憲氏に師事。第22回かながわ音楽コンクールヴァイオリン部門神奈川県市長会会長賞、第26回かながわ音楽コンクールヴァイオリン部門審査員特別賞、第4回横浜国際音楽コンクール弦楽器部門第3位、第12回日本演奏家コンクール弦楽器部門第3位。現在、東京藝術大学音楽学部附属音楽高等学校2年。

ドイツの作曲家マックス・ブルッフ(1838生～1920没)は、優れた音楽教師だった母親から音楽の手ほどきを受け、14歳で作曲した弦楽四重奏曲が認められ、奨学金を得てフェルディナント・ヒラーとカール・ライネッケに作曲を学びました。以後ドイツ各地で指揮者・教師として活躍。1891年から1910年の間ベルリン高等音楽院で教鞭をとり芸術院副総裁にも就任しますが、1911年73歳で音楽界を引退します。

今夜演奏する「8つの小品」は引退を目前にしたブルッフが息子のために特別に作曲したもので、1910年に出版されました。ブルッフ自身が「この8曲はそれぞれが完成された作品であり、必ずしもコンサートで8曲を続けて演奏する必要はない」と述べているように、どの曲をとっても、憂いを秘めたヴィオラの音色とクラリネットの関連な表現が交錯するロマンティックな傑作です。

今夜はヴィオラ・パートを4名の受講生が2曲ずつ交替で演奏します。

第1曲 イ短調 アンダンテ、第2曲 短調 アレグロ・コン・モート
第3曲 嬰ハ短調 アンダンテ・コン・モート、第4曲 二短調 アレグロ・アダジタート
第5曲 ヘ短調 「ルーマニアのメロディー」、第6曲 卜短調 「夜の歌」
第7曲 長調 アレグロ・ヴィヴァーチェ、第8曲 変ホ短調 モデラート



CD『シューマン、モーツァルト、ブルッフ：トリオ集／今井信子、ヒルトン、ヴィグノールス』CHANDOS (chan8776) ▲



●タマーシュ・ロジヨシュ Tamas Rozsos (ハンガリー)
1981年ハンガリーのブダペストに生まれ、5歳よりヴァイオリンを学ぶ。1999年ヴィオラに転向。リスト音楽院でブダペスト弦楽四重奏団のLaszlo Barsonyに師事、2005年同大学を卒業。ハンガリーに於いて「The Podium of Young Soloists」の入賞者としてリサイタルを行う。メジャテル音楽院卒業、現在はジュネーブ音楽院で今井信子、ガボール・タカーチ＝ナジの各氏に師事。



●セジュン・キム Ce-June Kim (韓国)
ソウル芸術高等学校、韓国芸術総合大学を卒業。韓国に於いて10代のためのコンクール、バロックコンクール等で第1位。大開嶺国際音楽祭(GMMFS)の協奏曲コンクールで第1位をとりオーケストラと共演し

※演奏者の田中利恵のプロフィールは裏面に掲載

4 二代 米川 敏子：風彩～箏・ヴィオラによる

Toshiko YONEKAWA II : KAZEAYA Colours of wind

演奏：難波 雅楽紫奈 (箏) シェン・リュウ (ヴィオラ)

[13分]

曲名は、風が作りなすさまざまな形と色を意味しています。作曲者は、箏にヴィオラを組み合わせましたが、2つの楽器を音域と音色で鋭く対立させるのではなく、両者が微妙な差異を次々と織り成していくように作曲しています。ヴィオラのアルコ(弓で弾くこと)とピッツィカート(この中には、弦を指板にぶつけるタイプで、バルトーク・ピッツィカートと呼ばれるものも含まれます)の対比が、重要な構成要素になっています。

曲は、静と動が交替しながら進んでいきます。冒頭の旋律は、極めて素朴なもので、箏とヴィオラの音色にふさわしいものですが、次第に、音高とリズムが複雑になり、これも風の織り成す変化によく対応しています。2005年10月に作曲され、同年のリサイタル(東京：紀尾井ホール)で、CDの二人の演奏者(箏：二代目 米川敏子、ヴィオラ：篠崎友美)によって初演されました。

[解説：徳丸 吉彦]

▲CD『二代目米川敏子の響き～箏・三絃オリジナル作品集』KING RECORDS (KICH 231) ライナーノーツより



5 プロコフィエフ：バレエ音楽「ロメオとジュリエット」から

S.PROKOFIEV : Suite from Romeo and Juliet, Op. 64 (arr. Vadim Borisovsky for viola and piano)

演奏：今井信子 (ヴィオラ) 田中利恵 (ピアノ) イェジン・ハン (ヴィオラ二重奏*)

[26分]

■作曲家プロコフィエフ・・・ロシアの作曲家セルゲイ・プロコフィエフ(1891生～1953没)はサンクトペテルブルク音楽院で指揮と作曲を学ぶ。ロシア革命後の1918年、日本経由でアメリカへ渡り、1923年からはヨーロッパを拠点として活躍、モダニズムの作品を発表した。1933年祖国に復帰後第二次大戦をはさむ10年間は伝統的様式を重んじた壮大な作品を手がけ、バレエ音楽「ロメオとジュリエット」もこの時代の作品にあたる。

■ロメオとジュリエットの物語・・・シェイクスピアが1594年頃に書いた戯曲が原作。ルネッサンス時代のイタリアの都市ヴェローナが舞台。モンタギュー家の子息ロメオと、仇敵キャピュレット家の令嬢ジュリエットが、舞踏会で運命的に出会い恋に落ちる。しかしジュリエットの従兄弟ティボルトに友人マーキュシオを殺されロメオは理性を失い、ティボルトを殺してしまう。ロメオは追放、両親から許嫁のバリスと結婚するよう強いられ、追い詰められたジュリエットは、一計を案じた神父から渡された薬を飲むが…

■バレエ作品について・・・「ロメオとジュリエット」の完成から上演までは紆余曲折をたどる。1935年ポリショイ劇場との契約で、演出家ラドロフ、振付師ラブロフスキーと共に台本を作り、全52曲のピアノ版を書き上げるが、試演会では音楽が踊りに適していないと酷評されて上演見送り。怒ったプロコフィエフは各7曲からなる管弦楽組曲を2つ作り、36年と37年に自らの指揮で初演。この組曲はアメリカでも絶賛され、37年にはピアノ組曲、46年に管弦楽組曲第3番も作られた。バレエの初演は1938年チェコのブルノ劇場。ソ連では1940年キエフ劇場で、ラブロフスキー振付、ウラノワのジュリエット、セルゲイエフのロメオでようやく初演。しかしここでもオーケストレーションの改変などでトラブル。第二次大戦後の1946年ウラノワがキエフからポリショイに移籍後に上演されたラブロフスキー版は、堂々たる舞台作り、明確な振付とダンサーたちの卓越した技量で、プロコフィエフの音楽の真価を世に知らしめ、20世紀を代表するバレエとして現在も最高の人気を誇っている。

(右画像はウラノワ主演のポリショイ・バレエ1954年収録)

■編曲者ポリソフスキー・・・ロシアのヴィオラ奏者ワディム・ポリソフスキー(1900生～1972没)はモスクワ音楽院在学中の1922年にベートーヴェン弦楽四重奏団を結成、1964年まで同団のヴィオラ奏者。リサイタルでも大いに活躍した。またモスクワ音楽院の教授として優れたヴィオラ奏者を数多く育て、シュニトケやショスタコーヴィチをはじめとする作曲家たちが、彼やその弟子のために作品を献呈している。更にポリソフスキー自身もヴィオラとヴィオラ・ダモーレのために250曲以上の編曲を残す。「ロメオとジュリエット」か

●作曲者：二代 米川 敏子 Toshiko Yonekawa II
3歳より母、初代・米川敏子(文化功労者・人間国宝)に地歌・箏曲の手ほどきを受ける。NHK 邦楽技能者育成会十八期卒業。平成5年度芸術選奨文部大臣新人賞受賞、平成7年度文化庁芸術最優秀賞、98年日本伝統文化振興財団賞、2004年エクソノモービル音楽賞、平成17年度芸術選奨文部科学大臣賞受賞。07年、米川裕枝改め二代米川敏子を襲名。研学会五代目家元。



●シェン・リュウ Xiang Lu (中国)
上海生まれ。8歳よりヴァイオリンを始める。2002年、上海音楽院ミドルスクールに入学。2008年に上海音楽院に入学。Jensen Horn Sin Lam 教授に師事。2010年5月には東京で「ヴィオラスペース2010」の公開マスタークラスに参加。スイス、ドイツ、デンマーク、北京の各音楽祭にも参加している。◎アジアからの受講生に対する奨学金助成対象者



●難波 雅楽紫奈 Utashina Nanba (日本)
本名は難波加奈子。小樽生まれ。6歳より本谷雅楽悠に師事。17歳で正派准師範取得。以後、雅貴代会の定期演奏会、札幌若菜会定期演奏会等に数多く出演。小樽ではマリンヒルホテルのクリスマスディナーショー、正月の催しに出演。2010年に第11回を迎えた雅貴代会「箏 ing」には第1回から出演している。北海学園大学卒業、小樽在住。

1) 前奏曲 2) 朝の歌 (ヴィオラ二重奏*)
3) 少女ジュリエット 4) 騎士たちの踊り
5) マンドリンを手にした踊り (ヴィオラ二重奏*)
6) ジュリエットの死 7) マーキュシオ

[26分]

ら作曲者の賛同を得て8曲を編曲し1961年に出版。その後ヴィオラ二重奏を含む5曲を新たに編曲し1977年に出版した。

■本日の演奏曲について・・・4幕9場のバレエ全曲は150分に及ぶ大曲だが、プロコフィエフの音楽は、登場人物や事柄を表す主題や動機を何度も反復させることで統一感がある。また「ロメオの主題」「愛のテーマ」など、多くが旋律的で、個性的であり、曲のわかり易さにつながっている。今夜演奏される7曲の中にも主要な主題が美しく散りばめられている。

1) 前奏曲 出会いと同時に恋に落ち深まっていく愛、無垢なジュリエット、離れていても抑えきれない若いふたりの想い…。ロメオとジュリエットの愛を象徴する3つの美しい旋律と、その先にある悲劇への予感。

2) 朝の歌 バレエではマンドリンで奏される爽やかな朝の歌。本来はジュリエットが仮死状態にあることを知らずに、バリスとの結婚を祝って人々が集まってくる場面の音楽。しかし1965年英国ロイヤル・バレエ団が初演のマクミラン振付では、舞踏会でジュリエットがリュートを奏で、一目惚れしたロメオが彼女のために踊るという演出で挿入されている。

3) 少女ジュリエット ジュリエットの初登場の音楽。乳母を相手に部屋の中を駆けまわるお転婆ぶり。母親から許嫁のバリスを紹介されて「いつまでも子供ではいられませんよ」と乳母にさどされる。

4) 騎士たちの踊り キャピュレット家の舞踏会。重々しく着飾った客人たちが踊る中、ジュリエットが登場。バリスに誘われて少し緊張気味に踊りを披露。仮面をつけて忍び込んだロメオは、彼女の姿に釘付けに。

5) マンドリンを手にした踊り 賑やかな市場に結婚行列の一行がさしかかり、若者たちはマンドリンをかき鳴らしながら曲芸師のように軽やかに舞い、群衆が喝采をおくる。

6) ジュリエットの死 バレエ後半のいくつかの場面がまとめられた組曲第2番第5曲とよく似た構成。ジュリエットの寝室で迎えた夜明けの「別れの抱擁」、バレエではこの主題がヴィオラもしくはヴィオラ・ダモーレのソロで演奏される。続く「間奏曲」は、ジュリエットが絶望を振り払うようにマントをひるがえし神父のもとへ駆けていく場面。そして再び寝室に戻り、受け取った薬をのむべきか逡巡する。ここでピアノの低音部で「死の主題」が奏され、徐々に重苦しい死に支配されていく。

7) マーキュシオ 一転して躍動感ある音楽は、ロメオの親友マーキュシオのテーマ。舞踏会でジュリエットに近づくロメオを不審に思ったティボルトの注意をそらすため、機転を利かせ、滑稽な踊りで客人たちの気を引く。狂言回しのなマーキュシオの不思議な魅力が印象に残る。

